

書道日本一、巻菱湖の世界。

巻菱湖は、江戸時代後期の1777年（安永6年）に現在の新潟市西蒲区巻地区に生まれ、後に江戸時代後期を代表する書家・漢詩人・文字学者になる。

通説では、3歳頃までの幼児期は母方の家で過ごしていたと思われる、その後、現在の新潟市中央区大川前通に移り住み、16歳頃までを過ごしていたといわれている。

菱湖は句読を郷人の谷次郎兵衛に教わり、書法を善導寺の興雲和尚に習っている。菱湖は幼少の頃より書において人並みはずれた才能があり、その証拠に6歳のとき、現・新潟市中央区の白山神社境内の天満宮に「天地」の2大刻字を奉納している。残念なことに現存はしていないが国会図書館

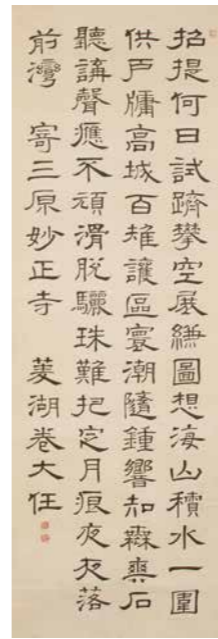
館所蔵の『篤園雑記』に、この2大刻字の縮図が記されている。これによれば、2大刻字は『高サ三尺許・長サ五尺五六寸許・字ノ大サ凡ソ一尺四方位』とあり、だいたい高さは90㎝で、長さは170㎝、字の大きさは、おおよそ30㎝四方になる。この他にも幼少期の話として、11歳のとき菱湖は、長岡藩主・牧野忠精侯が巡村で新潟に来たとき本陣へ招かれて揮毫をしている。このことにより、菱湖は子供の頃より書において人並みはずれた才能があったといえよう。しかし、不運なことに菱湖は15歳で母親を亡くし、それより前に養父も亡くなっている。そんなこともあり、親類の館柳湾をたより19歳で亀田鵬斎の弟子になる。

幼少

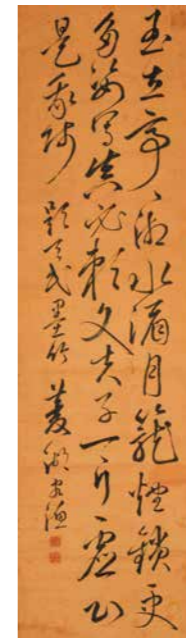
巻地区で生まれ、新潟町で育ち、江戸へ出る。



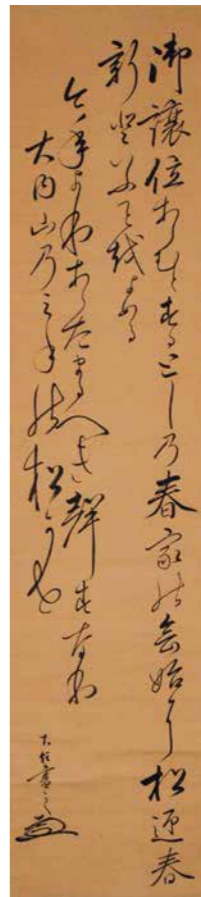
巻菱湖 53歳書 / 『石尊大権現』幟旗染用草稿
巻郷土資料館蔵（掲載のみ）



巻菱湖 書 / 自詠詩
巻郷土資料館蔵（掲載のみ）



巻菱湖 書 / 自詠詩
巻郷土資料館蔵（掲載のみ）



巻菱湖 書 / 仮名
個人蔵（掲載のみ）

書風

巻菱湖の書風と評価。

菱湖は、篆書・隸書・楷書・行書・草書・仮名・飛白の7書体を巧みに書くことが出来た。飛白を除く6書体においては、多くの法帖（習字手本）を刊行し、没後の明治・大正・昭和まで次々と復刊され習われた。

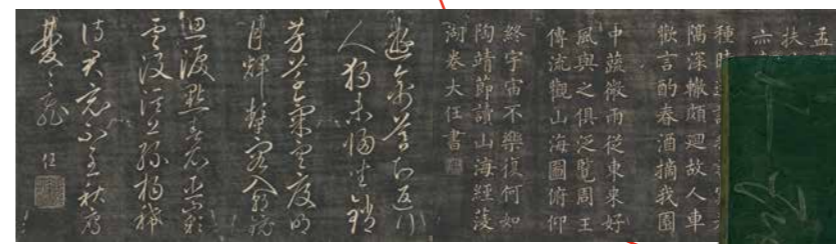
平明で端麗な菱湖の書風は、多くの人に好まれ、江戸一の書道塾となり、弟子は1万人を超えたといわれている。

ここに相沢春洋著作集より、菱湖の仮名についての一文を紹介する。『漢字を専門に書く書家が篆隸楷行草等各体を書くのは珍しくはないが、「かな」まで書いた人は多くない。大概の漢字書家は草書の筆法がわかれば「かな」は書けるものだと考えている向きが多い。しかし、決してそのようなものではない。むしろ線の妙味は「かな」の方にあるので、一筆紙に下しては息をつく隙もない。つきつめた気分と、その山桜を遠望する様な集合美配置の美は決して漢字に譲らないものなのである。菱湖の時代、京都方面には元禄享保にかけて有名な近衛予楽院公が出て上代様を書いていたのであったが、江戸にはその流れを汲む人もなく、只、橋千陰の書いた松花堂風があったくらいである。』

法帖

菱湖は、法帖（習字手本）も数多く刊行している。没する前年の66歳まで法帖を刊行し続けた。没後も生前書かれた肉筆手本を使用して版が作られ、数多く刊行されたと思われる。その合計数は、内容別で200種以上刊行したといわれている。北川博邦氏が平成22年に刊行した巻菱湖法帖目録によると170種（同内容含）が載っており、刊行年や刊行形態（折帖・冊子）をも分けると500種程に分けることが出来る。刊行年や刊行形態を抜きにしても、内容が違う法帖は、平成25年時点で156種にタイトルがついている。この他、北川博邦氏と巻菱湖記念時代館のタイトル不明のものが合計で20種以上は確認されていることから、180種は確実に刊行されたことになる。ここまで多くの法帖を刊行した人物は、日本の歴史上、巻菱湖の他はいないであろう。

多種にわたる巻菱湖法帖の世界。



巻菱湖法帖 / 『十二体書』
巻郷土資料館蔵（掲載のみ）



巻菱湖法帖版木 / 「大字 行書 千字文」
巻郷土資料館蔵（掲載のみ）



巻菱湖法帖 / 冊子『大字 行書 千字文』
巻郷土資料館蔵（掲載のみ）

巻菱湖日本酒ラベル
峰乃白梅酒造 コラボレーション企画



巻菱湖の「文字の絵本」
ミドリムシのちから コラボレーション企画



巻菱湖 肖像『江戸文人寿命附』より



『篤園雑記』 / 巻菱湖「天地」2大刻字（掲載のみ）



巻菱湖 書 飛白体『愛日』
巻郷土資料館蔵（掲載のみ）

菱湖は19歳で江戸へ行き、亀田鵬斎に書法と漢詩を学んだ。

菱湖は生涯を通じ、晋唐の名蹟や六書説文・漢詩などの、文字学と書法を学び続けた。ここに27歳の時に書いた書に対する自身の考えを掲載したが、文中に、『書と詩は唐に尽き、唐以降は大家でさえ皆、法に合っていない』といっている。これは鵬斎入門から8年目のことである。

菱湖の20代の生計は書籍の版下書きで立てていたといわれている。31歳の開塾後も版下は書いていたといわれているが、現在では菱湖により書かれたと断定できるものは少ない。

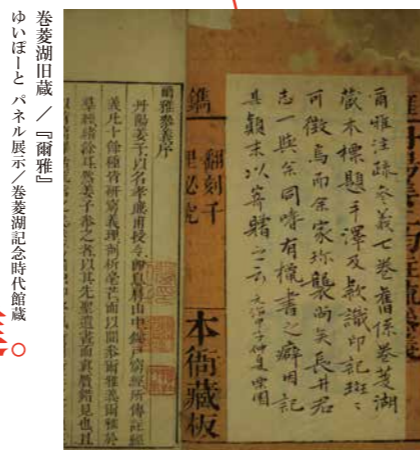
鵬斎は、菱湖入門にあたって学力と技量を試した結果、学問が足りなく、文字の根源について不

明であるとして『書道は筆先の功を競うものとみてはならぬ、書論に通じかつ文字の根源を知るためには六書説文の学を修めねばならぬ』と説いたといわれている。だが、菱湖の書技については非凡なものがあるとして鵬斎は自分の書を授けないで、晋唐の名蹟を学ぶことを勧めた。六書とは、漢字の成立と用法に関する6種の分類で、象形・指事・形声・会意・転注・假借である。説文とは説文解字の略で、中国最古の部首別漢字字典で、六書の説によって字の本来の意味を記したものである。菱湖の書技習得に関しては、生涯を通じて多種の法帖を臨書し、年代により様々な法帖に影響を受けていた。

学び

鵬斎へ入門。書道の道へ邁進。

巻菱湖 書 / 『二十七歳書論』
ゆいぽーと 展示 / 巻菱湖記念時代館蔵



巻菱湖旧蔵 / 『爾雅』
ゆいぽーと パネル展示 / 巻菱湖記念時代館蔵

